

<実践報告>

不登校児を改善した教師の実践事例

小野澤玲子 長野県上田市立神科小学校
 森 明美 長野県上田市立東小学校
 宮下 聡 長野県上田市立東小学校
 大澤安貴子 上田市教育委員会子ども教育課

A Practice of Cases where Teachers Improved the Pupil
 Who Refuse to Go to School

ONOZAWA Reiko: Kamishina Primary School, Ueda City

MORI Akemi: Higashi Primary School, Ueda City

MIYASITA Satoshi: Higashi Primary School, Ueda City

OSAWA Akiko : The Board of Education in Ueda City, Youth Services and Education Division

研究の目的	不登校児への有効的な支援を教師の実践から明らかにすること。
キーワード	不登校 学校環境整備 学習保障 学級集団の育成 実践的指導力
実践の内容	不登校児童への教育的支援とその改善方策
実践者名	小野澤玲子 森 明美 宮下 聡 大澤安貴子
対象者	神科小学校3年生A児, 東小学校3年生B児, 東小学校6年生C児
実践期間	2004年4月～2005年3月
実践研究の方法と経過	不登校児童を担任する教師と不登校支援を職務とする支援専門員との連携により, 教師の実践を支援するための話し合いや保護者との面接を通して, 不登校状況を改善した。
実践から得られた知見・提言	<p>① 不登校児の置かれている状況を把握し, 不登校となった原因の除去と居場所づくりに努めること。</p> <p>② 学校不適応の原因である友人関係, 教師との関係の改善を図り, 「自分が好かれている」という体験を多く積ませること。</p> <p>③ 教室でなくとも学びはできるという発想で学習保障をすること。</p> <p>④ 教室の受け入れ準備として, 他の児童の意識を育てること。</p> <p>⑤ 教師の実践的指導力の強化と, 不登校児に寄り添う対応の転換を図ること。そのための支援として外部機関との連携が有効であること。</p>

1. はじめに

文部省(現文部科学省)が「不登校は誰にも起こりうる」という見解を出したのは、1992年である。それから十数年を経過したが、今や不登校は現代社会全体の問題であると言っても過言ではない様相を呈してきた。こうした現象を森田(2004)は、不登校を生み出している現代社会の動向として「私事化(privatization)」を挙げる。つまり、これまでの社会に存在していた価値観が揺らぎ、現代社会では「いかに自分らしく生きるか」、また「自分が所属し活動している集団や社会に、どれだけの意味を見出すか」という意味探求社会に移行しつつあるという。森田は、この私事化社会への対応がすなわち不登校問題の課題だとし、子どもが登校しやすい学校環境整備と個々の状況に寄り添う柔軟な対応とで、学校自体が子どもを社会参画させていく支援の場となることだとしている。それには、どんな対応と支援が必要なのだろうか。

上田市教育委員会では、こうした状況を踏まえ不登校児が多い現状を打開するために、平成15年度から新たに教育現場と家庭とのパイプ役を職務とする不登校児童生徒支援専門員を配置した。その結果、教師と児童生徒と保護者との三者の橋渡しをする支援が極めて有効的であるとの判断から、平成17年度は、教育相談所に支援専門員を2名配置し、教育相談業務の一層の充実化を目指している。本稿は、この支援体制により、教育現場の教師と支援専門員(大澤)との協力連携により不登校を改善した3つの事例から、児童の実態とニーズに合わせた支援について報告するものである。

2. 集団になじむのが苦手なA児への支援

神科小学校 小野澤玲子教諭

(1) 支援前のA児(小3 女児)の実態

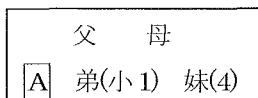


図1 A児の家族

母親の話ではA子は、保育園の頃から「行けたくない。」と泣き出すこともあり、なかなか友達の中に入れずにいたという。学校では大人しく、家では親の言うことを聞き、ま

じめで努力家だが、友達は少ない。

(2) A児への支援計画

16年度3年生A児を担当し、欠席が多く集団になじめないA児に出会い、不登校を防ぐ支援の必要性を感じ、支援専門員と協議して支援計画を策定した。(16.5.14)

<担任によるA児への支援>	<支援専門員による母親への支援>
<p>① 休み時間や給食時間に意識的にA児と会話し、A児への理解を深め関係を取る。</p> <p>② 担任がA児を遊びに誘い、仲間に入れるよう支援する。</p> <p>③ 自己実現の場を多く設定し、学校生活に充実感を持たせる。</p>	<p>④ 三人の子育てを一人でする状況(父親は単身赴任中)を悩んでいる母親への支援として、相談を継続する。</p> <p>⑤ 家庭でのA児の様子を知り、学校対応については担任に助言する。また家庭でのA児への対応を母親に助言する。</p>

(3) 実践の内容と結果

① 支援計画の実践

支援①を実践する中で、学校生活で特に心配そうな状況はないと思われたが、観察するうちに、忘れ物に対する不安があることや給食や清掃時間を守ることを必要以上に気にしていること、また自分の仕事をしっかりやろうとしている様子が観察された。そこで支援②として、女児の何人かを誘い「魚鳥木」のゲームをしたところ「先生、やろうよ」と声をかけてくるようになり、休み時間に遊ぶ友達ができた。支援③で変容が見られたのは、音楽会(16.6.26)でリコーダー演奏の伴奏をした帰りの会で、「終わってほっとした。頑張れてよかった。」と初めて挙手して発表したことである。その後も帰りの会や学級会で発言するようになり、給食もほぼ完食し、休み時間にぼつんとして過ごすことがなくなった。自分から担任に話をし、学習中にニコニコとした表情が見られるようになり、6月から11月は、身体の不調での欠席をしなくなった(表1)。

表1 身体の不調での欠席日数(3年生)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1日	1日	0日	0日	0日	0日	0日	0日	3日	1日	1日	0日	7日

次に支援専門員が行った母親への支援④は、希望により3回実施した。1回目(16.5.26)は、家庭での様子を聴く中でA児と母親で話をする時間があまり確保されていないことに対し、帰宅後はおやつを食べさせながら15分だけ話を聞くよう助言(支援⑤)した。相談後「子育てに関する悩みが話せ、胸のつかえが取れた気がした。」と母親は連絡帳に書いてきた。2回目(16.7.23)は、合唱クラブに入部した経緯と入部に伴い時間に対する自己管理ができてきたこと、学校の話をするようになり、失敗談やいやだった話も登場することが話された。3回目(16.12.22)には、学校の様子を嬉しそうに話し、友達(女児と男児)とのかかわりも増えたこと、家庭でも自分の気持ちを表現するようになったことが話された。また支援⑥として、A児と学級全体の児童への指導に役立てるために学級診断尺度(Q-Uテスト)を実施した。結果は、A児が学級での自分の存在感を過小評価しており、学級に対する満足度もやや低かった。そこで、他にもA児のように学級への不満を感じている児童が存在することへの危機感も手伝い、個々の児童と本音で話し合える関係づくりと学級内を改善するために、7月から毎月1回相談日を設定することにした。

② 「もめごと相談日」(16.7～17.3までの期間に8回実施)

相談の方法は、担任と児童が1対1で話をし、困っていることや担任への要望を聞くことと、児童から何もない場合は、担任が感じている児童の良いところを褒めることが基本である。そして担任が気になる点や他から意見や要望が出されている児童にはその事を伝え、担任と一緒に対応策を考えるというものである。実施当初は、児童からの要望は少なかったが次第に増え、担任が今まで感じ取れなかった個々の児童の気持ちや出来事(友達関係でのトラブルやいじめ、持ち物での校則違反、下校時のトラブル)を知ることとなった。早速これらの課題を学級指導に生かし、全体に関わることは学級会で話し合った。そして次の相談日には、その後の経過を聞いたうえで良かったことを中心に取り上げるようにし

た結果、学級内での様々な問題が目に見えて改善した。このように児童の声が学級の中に反映されると規範意識が育ち、互いに考えあう雰囲気が出てきた。驚いたことに元気そう
で心配がないと思っていた児童が実は悩みを抱えており、担任の見取りとは全く違う児童
の姿に、表面だけでは判断できないことと、児童の話に耳を傾ける姿勢の大切さを痛感し
た。また相談を通して結ばれた個々の児童との信頼関係により、学級全体が落ち着き、A
児が感じていたような学級としてのまとまりの希薄さが徐々に改善されたように思う。

③ A児の挑戦

身体の不調による欠席が再度増えたのは、12月から2月の期間である(表1)。この時期
は、気管支炎やインフルエンザによる出席停止を伴う病欠もあったが、そのなかで精神的
に大きな成長を遂げる出来事に遭遇した。それは、4年生から始まる委員会活動への希望
をとり決定する日(16.2.22)だった。A児は動物好きを理由に動物委員会を最後まで希望し
たが、定員の3名の中に入れなかった。決まらないのがA児ひとりだけとなり、うつむき
加減で元気がない表情ながら児童総会議案書を見に来た。

担任：(A児の様子を見ながら)Aちゃん。あとあいているところは、運動委員会しかないんだ。ごめ
んね。

A児：(だまってうつむき)わたし、運動だけはダメなの……。

担任：Aちゃんは、運動が苦手なんだよね。でも運動委員会は、ボールの空気入れとかミニ運動会の
準備とかが仕事だから、自分が運動をするわけじゃないよ。どうしても違う委員会がいいんだ
ったら、みんなに聞いてもらって考えよう。

A児：(首を横に振り、しばらくすると泣き始めた。近くの児童らも心配して声をかけたが、A児は
自分の席にもどる。担任は仲良しのS児に声をかけるよう頼む。)

一すぐ給食となり、担任はA児の班に入り一緒に給食をとる。A児は、依然うつむき加減で元気がな
いので委員会の話は避け、テレビやスポーツの話題で班員と話をした。

A児：(しだいにみんなの話に入ってきて、担任に話しかけるようになる。しばらくして突然ひとり
呟くように)わたし、運動委員会やってみようかな……。

担任：Aちゃんの気持ち、うれしいな。でも無理しなくていいよ。だめだったらみんなに考えてもら
えばいいからね。(A児の表情が明るくなってきたので)何でも経験だからやってみるといいね。

早速5校時担任からA児の事情を伝え全体に話をしてもらったところ、A児は「いろいろ
考えたんだけど、運動委員会をやってみようと思います。」と自分の意思を伝えた。
これを聞いた全体の児童から、すぐさま拍手が起こった。感動的なA児の心の成長を垣間
見た思いがした。振り返れば1学期は、自分の苦手な事に対して消極的な態度だったが、
この日その壁を一步、必死な思いで乗り越えることができたのだと思う。

3. 新しい担任になじめず不登校になったB児への支援 東小学校 森 明美教諭

(1) 不登校の原因及びB児(小3男児)の課題〈欠席日数：2年生86日、3年生67日〉

◎不登校のきっかけは、2年生になり新しい担任になじめなかったこと。

- 同時期に家庭の状況に変化があり、家族に対しての不安があったこと。
- B児の性格が過度に心配性で、失敗を恐れ、真面目で繊細であること。
- ◎家庭における祖母の権限やB児への期待が大きく、父親は子育てに無関心でわが子との接し方がわからないといった問題があったこと。

特に◎を改善に向けた重要課題と捉え、担任の対応や父親の役割を考えながら、母親と一緒に試行錯誤を繰り返した。

(2) 実践の内容と結果

① 保護者からの担任への不満は謙虚に聞き、担任自身の課題として受け止める

まず担任への不満をよく聞き、保護者とB児の気持ちを丸ごと受け止め、その気持ちに寄り添うために、全てを自分の課題として謙虚に受け止めることにした。家庭の所為にしても解決しないことと、まず保護者の信頼を回復しなければ進展はないと思ったからである。実際に担任に対する保護者からの不満は真実であり、その事に気づかせてもらい有難いと思えた。結果的に母親と信頼しあい連携してB児に対応できた。

② 保護者がB児のためにできる事は本気でやり、父母の役割を実践する

母親は、B児が休みたいときにはゆっくり休ませ、大丈夫だと励まし、充電できたら上手に学校へ誘う、という方法でゆったり構えていた。それでも時々、担任や相談員に不安な思いを打ち明けたが、B児の前では常に明るくさっぱりとした表情を崩さなかった。相談室登校するようになってからは毎日弁当持参で、ずっとB児と一緒に学校で過ごし、「いつか自分から離れていくと思います。」といつも笑顔で語っていた。父親は、自身も父親との関係が希薄だったということで、子どもへの接し方を知らなかった。そのため担任と母親の双方から父親に働きかけ、父親の役割を果たすよう支援した。例えば休日にB児を連れ出し遊んだり、一緒に入浴したりといったスキンシップや会話を大事にすること。また、簡単なプリントを宿題に出し、父親が教えてやり丸付けをする事も担任からお願いしてやって貰い、「お父さんのお蔭でB君は変わって来た。ありがとうございます。」と労いを添えて連絡帳で励ました。また、母は暖かく包み、父は時には厳しく試練を与えるという父母の役割分担について話し、「夫婦でそのバランスをうまくとってください。」とお願いした。

③ チャンスを見はからい登校刺激を与える

家庭訪問してB児の表情を見たり話したりしていると、充電具合がわかる。母親と相談しながら「そろそろチャンス」と判断した時、次のような刺激を与えた。

- ・ B児の好きなソフト麺やデザート等と一緒に献立表を届け続け、給食への関心を高めさせ、好物が出る日に狙いをつけて給食に誘った。その結果、7ヶ月ぶりに登校し相談室で給食を食べることができ、それが相談室登校のきっかけとなった。
- ・ 社会見学や遠足等の行事を前もって知らせておき、それから誘うと、学校を離れての学習やお弁当を持って出かけるような日には、参加できることが多かった。

④ 相談室登校の時期に配慮したこと

・学級の児童とのつながりを一番大事にした。休み時間には遊びに誘うこと、給食を相談室で友達と一緒に食べることを、体育等参加できそうな教科は誘いに行くことなどを学級の児童は自然にしてくれた。そうすることの良さを常に知らせ、感謝の気持ちを全体の児童に伝える努力をした。

・B児が好きなだけ相談室に居ていいし、帰りたいときに家に帰ってもいいという姿勢を担当と相談員が同じように示し、B児が安心して学校で過ごせるようにした。

⑤調子よく学級で過ごしている時期に、教室完全復帰に向けて配慮したこと

・運動会のダンスが上手だったことを褒め、お手本として皆の前で発表し拍手をもらうようにした。また短距離走では、完全に1位になれる組み合わせに配慮して、運動会で活躍し自信を持てるようにした。

・算数の授業では、B児が抵抗を感じないように比較的簡単なプリントをさせた。しかし他の児童との学力差を大変気にかけていることから、宿題もB児に合うものにして出し、父親に見てもらおうようにした。次第に授業中に皆と違う学習をしても安心して教室に居られるようになっていった。

・朝、家を出て教室に入るまでがB児にとっては、努力と葛藤の時間であり、大丈夫そうに見えても必ず母親に教室まで一緒に来てもらいB児を安心させるようにした。

こうした配慮が功を奏して、17.2.7より完全教室復帰を果たした。

(3) 担任の感想……教師のあり方を見つめ直して

不登校児を抱えた担任は、苦しい。しかし、自分を見つめ直す機会と捉え反省し、次のように学ばせてもらった。まず教師の決めた枠の中に全員を入れようとする、苦しむ子が必ず出てくる。様々な性質や家庭環境の子どもが多い昨今、子どもの心情や言動の背景にあるものを理解しようとする事なく、皆を同じ方法で同じ状態にさせようとしていないだろうか。特に、真面目で忠実に親や先生の言うことを聞こうとする子、こだわりの強い子、家庭内の複雑な問題を抱えた子などが、担任が定めた枠に入れずに苦しむ。そこで、「私の教室に来た子ども達は、私の決めた法律を守りなさい。」ではなく、「私も皆さんの教室の仲間に入れてください。」に、発想を転換することである。子どもはそれぞれ自分の力で伸びていく。担任に足りなかったのは、その子なりに伸びてゆく姿を暖かく見つめ、励ます姿勢だった。これを気づかせてくれたB児に感謝している。なお、実践を支えたのが支援専門員との話し合いである。相談は、担任の希望で16.9.24から17.2.24までの間に全部で8回実施した。毎回実践経過を振り返り次の実践を計画したが、B児と保護者への対応面での示唆が有難かった。

4. 複雑な家庭状況に育ち転入してきたC児への支援 東小学校 宮下 聡教諭

(1) C児(小6男児)の家庭環境と5年生2学期までの様子

〈C児の欠席日数：4年生48日(10月より転入)・5年生2学期まで12日〉

多額の借金による取り立てから逃れるために母子寮へ緊急避難してきた母親につき、4

才上の姉と共に転居してきた。父親とは、転居後正式離婚。転居前には、刃物沙汰寸前の夫婦ゲンカ等を目の当たりにし、C児が体を張って止めたこともあったという。

転入当初より不登校傾向が見られたが、相談員等の支援により次第に学校へ来られるようになった。5学年に進級してからは、普通に教室登校ができるようになり、高原学習など大きな行事への参加も見られるようになった。

(2) 5年生3学期から6年生の不登校の原因

〈C児の欠席日数：5年生3学期40日、6年生27日〉

5年生2学期までの様子からC児はもう大丈夫だと判断していた3学期、担任は、C児が苦手としている漢字学習に力を入れさせようと考えていた。そのため、1月末、自分からやってくると言った漢字の家庭学習に取り組んでいなかったC児に対し、厳しい叱責をした。これが直接のきっかけでC児は、3学期の間じゅう家に引きこもることになり、全欠した。全欠期間は、担任の家庭訪問も控えざるを得ない状態だった。

(3) 実践の内容と結果

① 6年生4月の取り組み

「6年になったら学校へ行くといっている。」という母親の言葉を頼りに家庭訪問を再開し、明日の予定や学級の児童(希望者が書いた)の手紙を渡すなどの取り組みを始めた。また、母親と共に登校することもお願いしたが、それはうまくいかず、断念することにした。そうした折、夕方遅く訪問したら、ちょうど外で遊んでいたC児とばったり会い、普通に会話できて以来、訪問の際には必ず本人と顔を合わせて会話できるまでに関係が改善した。また、学級の児童らは「一緒に修学旅行へ行きたい」との願いから、「放課後、C児の家に行って一緒に遊びたい」という提案をしてくれ、半数程度の児童は、何度か本人を交えて遊ぶ機会が持てた。それをきっかけに、C児が学校に来られそうだという日には、朝、男子数人で迎えに行く活動が始まり、開始して3回目のお迎えとなった16年4月22日、とうとう学校へ来ることができた。

② 支援専門員との共同研究(16.6.21～17.2.17までの期間に12回実施)

その後C児は、修学旅行にも無事参加し再び一人で登校できるようになったが、教室で学習できるまでには至らず、心の相談室で学校生活を送った。しかし次第に、校舎内に隠れる、耳や目を閉じて他を拒絶しようとする等、相談室自体への拒否反応が見られるようになってきた。そこで、校内で相談し、応接室(和室)をC児の部屋として解放し、担任が中心となって対応を行うこととなった。その頃より、定期的に支援専門員との相談を実施し、A児に対しての共同研究を行った。支援専門員のアドバイスの中で一番担任の胸に落ちたのは、「無理に教室へ引っ張り出すよりも、その場(応接室)で生み出すことを大切に」というものだった。そこで、これまでの発想を一変させ、C児の居場所である応接室を拠点にして、何が生み出せるかを中心に考えた取り組みを始めることにした。

③ 応接室での取り組み

C児の気持ちを考えたときに、一人離れた場所に居ても、教室の中で何が行われている

のかについては、かなり気になるだろうとまず思った。また、学級の子どもたちの気持ちもC児から離れていないということを、C児自身にも自然に感じ取れるようにしたいと考えた。そこで、担任が休み時間ごとに応接室を訪れ、その際には、その時間の授業で取り上げる内容についての学習問題を投げかけ、次の休み時間に、その時間でC児が考えたことを聞きながら、授業で出た発言や様子を伝えるという取り組みを続けることにした。C児の理解力が高いことが幸いし、この取り組みを通してC児は、他の児童とあまり変わらないペースで学習を進めることができた。また、学級内でグループ学習を多く取り入れ始めていたので、国語の話し合いの場面等では、班の児童が相談室を訪れ一緒に考えるような機会も設けた。加えて、給食の時には、希望者が応接室に行きC児と一緒に食べるようにしてきた。そうした積み重ねからか、応接室で一緒に学べる教科はだんだんと増えていった。また、休み時間中に一人で図書館行けるようになったり、苦手な漢字練習を自分から始めたりという積極的な姿勢が徐々に見られるようになってきた(16.7)

④ 学級の児童と、C児についての話し合う

2学期間、応接室での関わりを続けてきたが、教室には入れないまま12月に入った。学級の児童の中から「卒業までにはC児が教室に来られるようにしたいなあ。」という声が聞かれるようになった。しかしそれと裏腹に、男子の中で給食時間中応接室に行きたがらない様子を見せる児童も出てきた。話を聞いてみると、「だんだんC児がわがまになってきて、行っても楽しくない。」とのこと。具体的には、「給食を持っていってもありがたいの音が聞かれなくなった。」というC児自身のマナーの問題の他に、「部屋を汚すと怒るようになった。」「ケンカが起きるようになった。」という他の児童との関係が回復してきているゆえに生じているものもあることがわかった。そこで、改めて「C児が変わってきている点とその理由」について学級の児童全員と考えあう場を持った。その中で、C児が元気になってきているからこそ起きている現象が多いことをみんなで納得しあい、C児に対し「卒業までに教室へ」という願いをみんなが持っていることを改めて確かめ合ったりすることができた。

⑤ クリスマス会(16.12.24)をきっかけとして学級へ

12月の半ば、学級の女子の中から、「小学校最後の思い出に、クリスマス会をやりたい」という申し出があった。そこで、自分たちの力で計画を立てるということを条件に許可した。児童たちの中には、これをきっかけにC児を教室へという思いがあったようで、前日までの間に、何度となくC児に声をかけている様子が見受けられた。そして当日、児童たちの思いは見事に伝わり、C児は教室に来ることができた。準備期間の短さから心配していた会の内容自体も、全員が楽しめるようなゲームの工夫と準備がされていて、本当に楽しい思い出に残る会になった。とりわけ係の子が、ビンゴの景品に手作りクッキーを全員分焼き、小袋に分けて準備してくれてあったことには本当に感動した。児童が各自準備した交換用のプレゼントも、誰がもらってもうれしいようにという配慮が行き届いていた。この会から、C児との関わりをきっかけに、その他の友だちとの関わり方も考えられるよ

うになった学級全体の児童の育ちが感じられた。その後C児は、毎日数時間教室で学習できるようになり、3学期の2月後半からは、朝から一日中教室で過ごせるようになり、教室完全復帰を果たしたのである。

(4) 担任の感想

C児が引きこもったきっかけや、校舎内に隠れる、耳や目を閉じて他を拒絶しようとする等の姿から見て、教師に「こうあるべき」という形で叱責されることへの抵抗が大きいことを痛切に感じた。また、その背景として、「怒られる」ということの恐怖と、本校へ転校してくる前に体験した両親の刃物沙汰寸前の夫婦ゲンカによる恐怖感と結び付くのではないかという支援専門員の指摘が胸に落ちた。支援専門員と定期的に、担任が実際に行っている具体的な対応について考えあい、アドバイスをもらおうという今回のような共同研究の形が、C児への対応の仕方を見つめ返していく上では大変有効であったと感じる。

また、C児が教室に戻ってこられた一番の理由は、学級の児童一人ひとりが、C児も学級の大切な一員だという気持ちを持ち続けていてくれたことではないかと思う。C児を取り巻く学級の児童たちにとっても、「仲間」について学ぶかけがえのない機会が得られたと感じている。

5. 事例からの考察

3つの事例は、いずれも不登校や登校しぶりに至った原因が異なり、児童が背負っている背景も様々である。清川(2003)は、現代社会の激変した自然と社会環境が子どもの心と体の能力を低下させているとし、子どもの居場所作りを提案するが、門脇(1999)は、子どものコミュニケーション能力等の社会力の形成には、大人が徹底的にかかわり常に適切な応答を繰り返すことだとする。こうした対応が、今や教育現場にも求められている。小野澤教諭は、A児が苦手とする集団加入や集団での自己主張が適うような学級環境づくりを実践し、森教諭は、母親と連携して家族成員の役割を適正化しながら、教師自身をも含めた学級の体制をB児に適合させた。また宮下教諭は、C児の生育状況を踏まえ、信頼関係を構築しながらC児の居場所での学習保障に向けた支援を模索し、一方では、教室の児童の受け入れ準備を無理なく進め、C児に抵抗のない形で教室復帰を成功させた。3教諭の実践に共通することは、問題を抱えた児童と徹底的にかかわり、状況の改善に向けた適切な応答を繰り返したことである。

このように、不登校児の改善に学校が果たす責任と役割は大きく、ことに担任による適切な対応と有効な支援が改善の鍵を握る。山本と仲田と小林(2000)は、学校不適応の主たる原因として友人関係認知や教師関係認知を挙げ、これを改善する有効な手立ては、「自分は友人が好きだ」や「自分は先生から好かれている」体験を強化することだとする。また、西澤と田上(2001)は、学級になじめない子どもや登校していても教室に入れない子どもの不安や緊張を逆制止するとして、対人関係ゲーム・プログラムの有効性を実証している。3つの事例とも学校でのこうした対応が、A児B児C児の学校適応を促進させた。また、田

上(1999)は、学級担任ができる支援として登校しづらい原因の除去と家庭や学校での居場所づくりを勧め、小林(2003)は、発生要因よりむしろ問題の維持・悪化要因に着眼する必要性を説くが、C児は、まさにこうした状況に遭遇していた。C児にとって登校しづらくなった原因が除去されても教室に入らず、居場所となるはずの相談室にも適応できず、次第に人間関係も狭まり悪化の一途を辿っていた。そんなC児に宮下教諭は、心から安心できる居場所を提供し、そこでC児に正対しながら学習を支援した。そしてクリスマス会をきっかけにC児の教室復帰を成し遂げたが、そこには担任にしかできない児童への観察眼が有効に働いている。教師による観察の重要性を主張する M. ヒムレイと P.F. カリーニ(2002)によれば、教師の力量は観察から始まるとする。まさに宮下教諭は、鋭く細やかな観察からC児の学習意欲と能力を発見し、学級の児童からは、自分たちの仲間として心からC児を迎えたいとする気持ちを引き出したのである。この観察眼を含めた教師の力量である実践的指導力については、大澤(2004)が、8つの実践的知識として分類したが、3教諭ともこの8つの実践的知識を駆使しそれぞれに実践したことが、大きな成果に結びついたと言っても過言ではない。

なお、本稿の執筆分担は、2節は小野澤、3節は森、4節は宮下がそれぞれ担当し、1節と5節は大澤が担当した。

文献

- 門脇厚司, 1999, 『子どもの社会力』, 岩波新書
- 清川輝元, 2003, 『人間になれない子どもたち』, 榎出版社
- 小林正幸, 2003, 『不登校児の理解と援助』, 金剛出版
- M. ヒムレイ ; P.F. カリーニ編, 2002, 『描写レビューで教師の力量を形成する』, ミネルヴァ書房
- 森田洋司, 2004, 「現代社会における不登校」, 『不登校とその親へのカウンセリング』, ぎょうせい
- 西澤佳代 ; 田上不二夫, 2001, 「対人関係ゲーム・プログラムによる不登校児の指導」, 『カウンセリング研究』, 第34巻, pp. 192-202
- 大澤安貴子, 2004, 「アクションリサーチによる教師の実践的指導力の向上に関する実証的研究」, 『中部教育学会紀要』, 第4号, pp. 1-16
- 田上不二夫, 1999, 『実践スクールカウンセリング』, 金子書房
- 山本淳子 ; 仲田洋子 ; 小林正幸, 2000, 「子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連-学校不適応予防の視点から-」, 『カウンセリング研究』, 第33巻, pp. 235-248

(2005年4月30日 受付)